

---

# 獣人世界の異邦人

猫馬鹿

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

獣人世界の異邦人

### 【Nコード】

N4918Z

### 【作者名】

猫馬鹿

### 【あらすじ】

目が覚めたらネコミミ付きのオッサンに囲まれてた。・・・何じやそりゃあ！一番近くに見えた町に入ってみればいきなり犯罪者扱いされるわ、国の戦争に巻き込まれるわ、帰る方法は解らないわ・・・ヤメッ！考えるのヤメッ！まずは寝所ねとと飯だ。話はそれからだ！

これは本人の知らないうちに異世界トリップをしてしまった少年 倉橋宗一郎（一応主人公 本業傭兵、副業高校一年生）と彼の仲間たちの物語である。 \* 処女作になります。拙い文や駄文になるか

と思いますが読んでいただけると幸いです。以前間違っ  
て短編で投稿してしまっただけで連載として再投稿させていただきます。

## プロローグ 目が覚めたらネコミミ親父に囲まれてた(前書き)

以前投稿した分が間違っ  
て短編で出てました。申し  
訳ありませんが、こ  
っちが本編です。

## ブローグ 目が覚めたらネコミ親父に囲まれてた

俺は全力で逃げていた。

ん？何から逃げてるかって？まあいい、聞いてくれ。

俺は自宅の有る町の端の方にある山にいった。

寝るのにちょうどよさそうな木を見つけたので、木に寄りかかって少し昼寝をすることにした。

目が覚めるといつの間にもやら十人ほどのオッサンに囲まれていた。

なぜか鉄製の槍を突きつけられるおまけ付きで。

オッサンどもは皆同じ格好だった。

ドクエ辺りに出てきそうな皮の鎧を着ていた。

- それはまだいい -

下卑た笑いを浮かべながら、「おとなしくしろ。怪しい奴め」とか言ってたが。

- 何故かバリバリ日本語話してんだが・・・気にするな問題はそこじゃない -

しかも全員が全員やたらと俺の尻を血走った目で見ている。

- もしかしなくても貞操の危機か？どんだけ欲求不満なんだよこいつ等は！穴なら何でもいいんかい！・・・しかし一番アレなのはそこじゃない -

ココまで聞くだけならコスプレ趣味のゲイ親父が集団でいるだけだ。悪いがその程度なら叩き潰して終わりである。自慢じゃないが我ながら波乱万丈な人生送ってるんだ。その程度なら慣れっこである。無論、無傷で切り抜けるくらいは造作もない。なんでかって？言わせんなよ恥ずかしい。

・・・話が逸れた様だ。要するに何が原因で全力で逃げるハメになったか。

ソレは・・・アレだ。オッサンどもに付いてるピコピコ動くネコミとネコミっぼだ。

・・・ソレがどうしたって？

馬鹿野郎！オッサンにネコミミ付けてもキモいだけだろうが！

しかもゲイだぞ？ゲイ。

悪いが俺は同性愛に理解はない！男同士ならなおさらだ。

しかもネコミミ動いてんだぞ？どういう訳かマジで本物臭いし・・・

以上の理由から俺は逃走することを決めた。なぜならキモ過ぎな上に貞操の危機のおまけ付だ。

想像してみたい。トロールみたいなオッサンがネコミミコスプレして血走った目で自分の尻見てんだぜ？もう雌に種付けする直前の雄犬みたいな目で。むっちゃ凝視しとるがな！

そりゃ逃げるよwてえか逃げる以外の選択が無いわ！

そう判断した俺は懐から携帯のカメラでフラッシュをかまして、妖怪ネコミミ親父（仮）がひるんだ瞬間に全力で逃走した。

そして、冒頭にいたるといふ訳なんだが・・・一言言わせて欲しい。

「どうなってんのか誰か説明しろ！チツクショーー」

プロローグ 目が覚めたらネコミミ親父に囲まれてた(後書き)

拙い文ですがこれからも読んでいただけると幸いです。

**プロローグ2 在る少年の数時間前の日常（前書き）**

今回は宗一郎が異世界に迷い込む数時間前のお話です。

## プロローグ2 在る少年の数時間前の日常

・・・話は数時間前に遡る・・・

「はあああああ。やはり猫はいいなあ・・・。癒される。」

俺は教室で雑誌を読みふけていた。（ちなみに読んでる雑誌は月刊猫の友五月号だ）

現在、絶賛授業中なのだが新学期（つつても出席日数足りなくて留年してるがw）なので気にしない。

理由なんぞ言うまでも無い。過去受けた授業なんぞ聞く気が無いからだ。

ちなみに去年の成績自体は中の上だったりする。出席日数自体が足りなかったから留年しただけだ。

・・・まあその事で半ギレの義姉あねには殺されかけたが・・・いや忘れよう。アレは黒歴史だ。

「はい、今日は授業はここまで。明日はこの続きからだから予習しとけよ。」

授業を担当していた教師はそういつて教室から出て行った。やっと授業が終わったようだ。

キーンコーンカーンコーン

チャイムが鳴った。現在六時限目だから今日はここで終わりだ。席を立とうとした時、知り合いが近づいてきた。

「宗一郎、また授業中に雑誌読んでただろ。」

こいつの名は相良礼二。180程度の身長に黒目黒髪、顔は二枚目半で体形はいわゆる細マッチョだ。

我が友人にして戦友、共に現在日本唯一のPMC傭兵会社に籍を置くれつき

とした傭兵だ。

「別にかまわんだろ？二度も同じ内容聞く気無いしな。そんな暇あったら猫ながめとく方が精神にいいからな。んで、用件は？」

「・・・まあいいか。隊長どのから連絡だ。しばらく待機だよ。いつでも出れるよう準備はしとけとよ。」

「ふーん。近い内にまたテロ組織制圧戦でもやるのかね？俺としては大歓迎だがな。ここにいと腐っちまいそうだな。」

「・・・まだお前はこっちの生活には慣れないのか？」

「まあな。五年近くゲリラやってりゃあこの国は平和すぎらあ。ここ卒業したら本格的に傭兵になるかね。一番手馴れてるしな。」

「おいおい、瑞樹姐さんが泣くぞ？いい加減血生臭い世界から足洗えってな。」

「関係ないな。俺はすでに壊れてるからな。それに殴り合いならともかく殺し合いなら俺が勝つ。」

「はあ・・・俺みたいに家庭の事情で傭兵をやらざるを得ないんならまだしもお前は違うだろ？おじさんもいってたんだろ。いつでも辞めていいって。」

「？なにを勘違いしてるんだ？俺は好きで傭兵やってんだよ。義父おじさんには悪いが、ね。少なくとも今は、そういう世界に片足つっこんどかねえと正気が保てんよ。あと猫力フエな。アレが無いと正直この生活キツイわ。」

「さらっと妙な物混ぜるなよ。お前が猫馬鹿なのはよく解ってるから。てか猫力フエと戦場同列に並べんな。まったく方向性が違うだろっつが。」

「俺にはどっちも必要なんだよ。刺激をくれる戦場と癒しをくれる猫はな。用件はそれだけか？んじゃ俺は帰るぜ。」

俺は席を立ち教室から出た。

「……やれやれ……戦場で育つてえのは厄介なものだな。はあ……姐さんになんて言おう……」

宗一郎が立ち去った後、俺はため息をついた。宗一郎の事情を知らない奴から見ればあいつはイカれた戦争狂にしか見えない。ソレは紛れも無い事実だ。

だが、偶然にも俺は知ってしまった。知っている以上見てみぬ振りするわけにもいかない。主に個人的な理由で、だ。

まず、俺が死にたくない。P M Cの傭兵会社の仕事で、俺と宗一郎は歳が同じことも有りよくコンビを組まされるのだが、宗一郎は拳銃しか使わない変わり者だ。マシンガンやアサルトライフルは意地でも使わない。

間違えなく変人の類だ。射程にせよ面制圧力にせよ拳銃は前記の二つには遠く及ばない。

射程ではアサルトライフルに、面制圧力では両方にそれぞれ劣っている。

現在の軍隊やテロリストがメインで使っている銃器は上記の二種類だ。

ということだ。戦う場合、相手の射程内に入る事が大前提となる。俺ごと、弾丸の雨の中に飛び込むのだ。いつ流れ弾で死んでもおかしくない。

もう一つは……まあアレだ。あいつの姉貴に頼まれたのだ。

それもあるがあの人を泣かせたくない。主に身の危険的な意味で……。

「ま、がんばりますかね。将来の弟君（仮）の為に……っと」

俺は瑞樹の姐さんと合流するため町に繰り出した。

「はあああ。義姉あの人にも困ったもんだ。さてどうするかね？」

俺は当てもなく町を流離っていた。言いたいことは解るのだ。

ゲリラをやっていたのは必要に迫られたからだ。出来なければ俺が殺されるか死ぬまで慰み物にされているかどちらかだったからだ。

発展途上国の反政府ゲリラなぞそんなものだ。

獣性むき出しで殺しあうのが戦争というものだ。ゆえに紳士の軍隊やゲリラはいない。

唯一の救いはそのゲリラが圧政を敷く独裁政権に対する反政府レジスタンスだった事ぐらいだろう。

まあそうだとしても前記の通りな点に変わりはない。卑怯だの外道だの罵る奴もいるだろうが、そいつは頭がおめでたいのだろう。正々堂々なんて方法が取れる奴は力が強い奴だけだ。弱い奴が強い奴に勝とうとするなら手段を選んでる余裕は無い。戦いは勝たなければ意味が無いのだから。負ければ全て失い踏みにじられるだけなのだから。

話を戻そう。要するにそんな環境で生きてきた人間の価値観は平和な国で生きてきた人間にとってはひどく歪んでいるのだろう。後者である義姉は前者である俺を前者の価値観に矯正したいのだろう。まあ、あそこに着いたばかりの俺ならともかく今の俺には何をしても無駄だが。現に今も似たような事してる訳だし。辞めさせたいんだろうなあ。まあ生の実感って奴を得られん生き方なぞ今更御免こうむるが。

「さて、どうするかねえ……。義姉あねき貴と顔合わせてもいつも通り説教と格闘戦にしかならんだろうし……」

前にも言ったが殺し合いなら勝機は十分ある。信じられないかもしれないが、義姉に格闘戦で勝てる奴など少数派だ。ぶっちゃけた話世界クラスの上から二十人ぐらいだろう。冗談抜きで化け物だ。強いて言うなら殺し合いの経験が無いことぐらいしか救いが無い。ま

あれゆえに殺し合いなら俺が勝つという話になるのだが。必要なモノがまるで違うし。

「・・・山にでも行くか。久しぶりに黄昏て来よう。今日は野営だな。荷物取ってこねえと・・・」

俺は久しぶりに町の西端から山に登る事にした。

その選択がどいう事になるのかも知らずに。

## プロローグ2 在る少年の数時間前の日常（後書き）

近いうちに登場人物紹介書こうか思案中です。

そのうち番外編扱いで書こうかと思いますが、宗一郎君の過去は地味に重めです。

某漫画の花のコードネームの犯罪請負人みたいなやつです。

瑞樹さんはもうちょっと先に登場させる予定。礼二君も再登場は同じ位を予定しています。

ブローグ3 とりあえずネロミニオヤジから情報収集を試みてみた。殺戮付き

今回は初の戦闘です。

「はあ、はあ、はあ、ここまで来りゃあしばらく時間は稼げるだろ。」

「あれから数十分逃げ続けネコミミ親父を撒くことには成功した。」

「しかしここは何処だ？寝てる間に拉致られたのか？あの山はそんなに標高高くないし、もう麓まで来ててもおかしくないはずなんだが・・・ん？なんで視界に海が見えてんだ？俺の家はY県にあるんだが？内陸県なんだが・・・もういいだろう。そう考えるしかないみたいだし。」

「・・・コレは異世界って奴か？マジで？」

「自問自答してみる。まあ答えは明白すぎるんだがな。信じらんないし。」

「・・・さーて犯罪者ルートか勇者ルートかどっちだろうって、間違いないく前者だよなあ・・・」

「後者なら「ケツ掘らせろゴルア」な視線なぞむけんだろう。仮にも何か倒して来いって奴らだ。普通に考えて持ち上げておいて利用するのが正解ってもんだ。まあ奴隷契約かまして隷属を強制させるって場合もあるか。」

「装備の確認しとくか。戻り方知らんし、最悪逃亡生活だしな。」

「ふむ、テント張る前に居眠りしたのが幸いしたな。」  
「俺の前にずらりと野営装備が並んでいた。」

「テント（最新の小型に折りたためる代物だ）にコンロ（缶のガスで火を出すタイプ）にフライパンにカレーの食材（肉、人参、玉葱、ジャガイモ、米少量）あとは鍋にランタンにアーミーナイフにライター。最低限必要なものはそろっているようだ。」

「武器はCZ75にコルトパイソン4インチにベレッタM92Fか。」

我ながら趣味に走った装備だな。

弾丸は9mmパラベラムが・・・100にマガジンフル装填でそれぞれ10、リローダー付きのマグナム弾が6セットか。基本はナイフで行かないとまずいか？」

「ん？なんでんな物騒な物持つてるかつて？用心だよ、用心。サツに見つからないようにすれば問題ねえよ。傭兵ライセンス持ちだしな拳銃（実弾MAX装填済み）以外は全部リュックサックに詰め込んでもってきた。拳銃は服で隠して持ってた。

「装備も確認できた。んじゃ、あの妖怪何人が締めて情報吐かせるとするか。」

俺は妖怪ネコミミ親父を狩る準備を始めた。

- 数分後 -

まあ予想通りといえは予想通りに妖怪（？）たちはやってきた。

「しっかしあのガキどこいきやがった。」

「まったくだぜ。久しぶりに肉穴で又けるかと思ってたのによお。」

「まあいいじゃねえか。こんなところにいるんだ。すぐに捕まえられんだろ。」

下卑た笑みと欲情に塗れた目をしながらネコミミ親父たちが歩いてきた。

俺は畏をしかけた場所の近くの木の上上がり妖怪どもを見ていた。

「あいつらも温いねえ。俺がただで犯されるタマとでも思ってるのかね？」

「だったら教育してやろう。命という対価を持って。誰を相手にしているのかという事を。」

「じゃあ始めよう。皆殺し教育の時間だ。」

「うおっ！」

「ん？どーしたんだよ？」

「いや、なんか草に足引つ掛けたみたいで・・・。」

俺は先頭に立つてた妖怪？が俺の仕掛けた罠（草の先端を結んだだけ。時間無かったからな。）に引っかかったのを契機に妖怪どもに襲い掛かった。

罠に掛かった妖怪？に向けて木の上から落ちる。

首にナイフを叩き込み、そのまま貫通させた。まあ確実に死んだな。これで一体。

「ッ！このガキイイイイ！！」

槍を持った妖怪？が俺を貫こうと突きを放つ。しかしそんな見え見えの攻撃なんぞ当たらない。俺に当てたいなら弾幕ぐらい張れつての。横によけると同時に逆の手に持ったM92Fを発砲する。三点バーストで放った銃弾は前にいた妖怪？三体の眉間を貫き絶命させる。これで四体。

「くつなんだそりゃあ！んな武器ありかよっ！」

一番後ろにいた妖怪？が叫ぶ。はあ？あいつら拳銃も知らんのか？

タアンタアンと銃声を鳴らしながら妖怪どもを始末していく。戦闘が始まってから物の数秒で生きている妖怪？は一体になっていた。

「さーて、覚悟はいいか変態オヤジ。とりあえず吐くモノ吐いて死ぬか、それとも今すぐ死ぬか好きな方を選べ。まあ逃げた所で拷問が追加されるぐらいだがなあ。」

そう言いながら俺はM92Fを一人生き残った妖怪？に向けて。

「うおおおおお！！！」

向けられたM92Fにかまわず、妖怪？は槍を振り上げて突進してきた。

「じゃあな 変態！」

パァァン

銃声と共に発砲された9mmパラベラム弾が妖怪？の眉間に穴を穿った。

ブローグ 3 とりあえずネコミミオヤジから情報収集を試みてみた。殺戮付き

ちなみに何故、宗一郎が武器を持っていたのか？って疑問は出ると思いますが、用は野生動物狩って喰う気だったからが作者からの返答です。喰い盛りですしねw

まあ普段から常備してたりしますが。

あと、なんで散弾銃じゃないのか？って突っ込まれるかと思いますが、彼は拳銃以外銃は使わない変人なので。CZ75は初回生産品でゲリラやってた時の彼の兄貴分の形見です。パイソンとM92Fは中古品です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4918z/>

---

獣人世界の異邦人

2011年12月17日09時57分発行